

# 古高取通信

平成29年 1月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

- 1. 活動の拠点を創る
- 2. 古高取の知識を深める
- 3. 古高取の魅力を伝える
- 4. 次世代へつなげる

## 古高取を伝える会会報

### 直方の高取焼



古高取

#### 目次

古高取の魅力伝える	2
古高取紹介	3
窯元紹介	4
活動の記録	4
なんでも掲示板	5

「ものをつくる手ごたえを」

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い致します。

昨年十一月、筑豊美術展七十周年記念事業の一環として、六年生の抹茶椀四百六十個が直方中央公民館で展示されました。

圧巻という言葉を捧げます。

四百六十個という、数ではなく、一つひとつの形の違い、歪み、釉薬の流れが温かいテイストになっていることに熱くなりました。

自分で作るの自分しかできないという事を痛感しました。自分でつくる事の豊かさ、喜びを子供たちに感じてほしいものです。

自分でつくった茶碗には、自分自身の心のありようを変える不思議な力があるのではないのでしょうか。

この茶碗づくりの体験をもとに、歴史を見る目を育ててほしいものです。

歴史を見る目を持つことは、いまを見つめ、未来を拓くことでもあるといくことを、しっかりと伝えていきたいものです。

柴田ムツ子

## 古高取の魅力を伝える

谷尾美術館別館（アトスペース谷尾）に展示している高取焼

直方市教育委員会  
文化・スポーツ推進課 無津呂 健太郎

前回、中央公民二階の郷土資料室に展示している高取焼の紹介をしました。直方市には、もう一か所高取焼の展示が行われているのをご存知でしょうか？

それは、古町商店街の南側入り口にある、国登録有形文化財になっている旧十七銀行のレンガ造り



の建物です。現在は、谷尾美術館別館（アトスペース谷尾）として利用されており、主に美しいガラス製品が展示されています。その一角（商店街側の入口を入って右奥の展示室）に、高取焼の展示コーナーがあり、ここには、内ヶ磯窯跡から出土した高取焼が静かに並んでいます。展示数は多くありませんが、発掘調査された資料の中でも選りすぐりの高取焼が展示されています。

ここには、茶入や水指など、献上品やとして丁寧<sup>テイジツ</sup>に造られていた茶器から、碗や皿、壺、挿鉢など庶民の生活を支えていた日用雑器まで幅広く並んでいます。内ヶ磯窯跡では、丁寧<sup>テイジツ</sup>で豪放、瀟洒<sup>シヤウシャ</sup>につくられた茶器に注目がいきがちですが、日用雑器も大量生産を行っています。

展示室に入るとまず、茶入が目の前に現れます。茶入は当初「唐物写し」と呼ばれる中国産の茶入を模倣して鉄釉<sup>テツウ</sup>をかけたものを作っていました。隣に並んでいる藁灰釉<sup>ワラハイウ</sup>（乳白色）をかけた茶入は、「唐物写し」を脱し、高取特有の作風をつくろうとした意図が感じられます。展示ケース正面真ん中付近には、皿の破片が展示してありますが、表面に円形の模様が装飾



されています。これは、桃山時代の備前焼に特徴的な模様で、その赤や茶色で丸い見た目がまるで饅頭や牡丹餅を置いたように見えることから『牡丹餅』と呼ばれています。牡丹餅模様は、器の表面にぐい呑みや徳利などを意図的に置いて焼いたものです。元々、作品同士を重ねて焼いた際、偶然あらわれた模様を取り入れたと考えられます。

上段左側には、大小の水指が並んでいます。大胆に変形を加え、胴をくぼませた水指は、織部好みと呼称される意匠のもので、備前、伊賀、信楽などの全国的に著名な焼物と共通する意匠です。この他

にも、瀬戸焼の影響がみられる天目茶碗や志野焼の影響が色濃い台付皿など興味の尽きない陶器が多く並んでいます。

内ヶ磯窯跡は、一六一四年〜一六三〇年頃までの約十六年間という高取焼四百年の歴史からするとほんのわずかな期間しか操業していませんでした。しかし、肥前・備前・美濃・信楽など全国各地の焼物から多彩な装飾法を取り入れ、バラエティーに富んだ焼物を生産していたのです。その後、白旗山窯、鼓窯へと高取焼の生産地は移っていきませんが、内ヶ磯窯が、後の高取焼の基礎をつくったと言えるのではないのでしょうか？

このように、静かに並んでいる無口な高取焼を、直方の歴史だけでなく日本の歴史を力強く雄弁に物語る高取焼へと変えていくことが大切です。皆さん一人一人がどのように出土品や文化財を鑑賞し、何を感じとるかによって「物語る」内容も変化するでしょう。私たち学芸員は、少しでもそのお手伝いが出来ればと考えています。高取焼は、皆様に何を語ってくれるのでしょうか？ぜひ、アトスペース谷尾の高取焼をご覧ください。おしゃべりをしてみてはいかがでしょうか？

前号には、幻の檜柴肩衝（たらしばかたつぎ）についてまとめてみました。今回は三大肩衝の一つである初花肩衝について述べてみましょう。

初花肩衝は大名物（おなめいぶつ）で漢作唐物の肩衝茶入で、国の指定重要文化財である。東山名物として信長・秀吉が愛蔵したものの。最終的には徳川將軍家に伝来した。

初花の茶入はその器形の状態・施釉・その景色ともに全ての茶入に冠絶するもので、いささかの損傷もない。

口造り、肩の衝き方、胴の張り工合とも造形の精緻を極め、総体簿柿色・薄紫色の交じった地色、肩は一樣に黒釉を載き、胴に至ってこの黒褐釉が長短三条の流れをなし、見事な置形を呈している。

土は薄鼠色で、畳付は板越しで底面が少し持ち上がっている。蓋一枚と袋二つが添い、さらに念誓（ねんせい）がこれを献じた褒賞としての蔵役・酒役の諸役を免許する家康・秀忠

の判物の写しが添っている。現在徳川記念財団に所属されている。

茶入の法量は、口径四・七cm・胴径七・九cm・底径四・五cm・器高八・三cm・甑高一・一cm・重量一三九・九gを計測する。

この初花の銘は東山文化の担いで足利義政で、その形姿を天下の春に魁ける梅を初花にたとえ名付けたと言われ、鳥居引拙（とりいんづつ）を経て京の大文字屋栄甫（おおいもんぢやえいほ）が所持、永禄十二年（一五六九）信長の東山名物召上げの第一号となった。天正二年（一五七四）の相国寺の信長大茶会に飾られ、同五年（一五七七）末、信長から嫡男信忠の叙位任官を祝ってこれを首として十一種の茶道



初花肩衝（徳川記念財団所蔵）

具が与えられ、翌六年（一五七八）正月に信忠はこれの披露の会を開いている。同十一年（一五八三）四月、柴田勝家を破った豊臣秀吉に政権確立を見込んだ家康は、三河松平一族の松平念誓（しんせい）からこれを召し上げ、石川家成（いしかわいえなり）を使いとして秀吉に贈って厚誼を求めた。同七月、秀吉は大坂初茶会でこれを用いた。以来その茶道具はの随一として大茶会にこれを飾った。

秀吉の没後は、遺物として宇喜多秀家（うきまたひでよ）がこれを得たが、秀家が関ヶ原の役の西軍に属し捕らえられた。初花肩衝は家康に戻った。

やがて大坂の役の戦功によってその孫の越前宰相松平忠直（まつただいらたけなほ）が賜ったが、その誅死によって再び將軍家に戻った。その後徳川宗家に伝えられた。

#### 註

註1 茶器の所謂名物には三種ある。千利休以前、足利義政の東山時代のものに『大名物』といふ。利休時代のものに『名物』といふ。降って小堀遠州の選定したものを『中興名物』といふ。

註2 松平念誓と称し、初花肩衝を探し出し家康に献じたのが有名。名は清藏・親宅。家康に仕え、三河国長沢郷の代官となり、その息子の信康に配せられたが、やがて蟄居。天正七年（一五七九）信康の卒去で出家。その後家康に再任し、初花を献上し、三河国目代に任せられた。その子孫も御家人となった。天文二年（一五六七）慶長九年（一六〇四）まで生存。

註3 東山時代の茶湯の名人。珠光に次ぐと評せられた。姓は鳥居、堺の人といわれるが、ともに詳らかでない。むしろ京都の町人になりたい。名物を多く見立て、特に引拙棚の創案が知られている。これに姥口釜・銅縁桶水指・胡桃口杓立・合子の四具が組まれ、引拙棚物として秀吉に伝来した。なお千種壺・引拙茶碗（本能寺の変で消失・大嚴猿釜・虚堂墨蹟などが引拙名物として知られる。

註4 京都の町人。下京三条立売に住した。姓は足田氏らしい。初花肩衝や虚堂墨蹟などを所持。この初花肩衝を松永久秀が所望したのは拒んだと言われるが、永禄十二年（一五六九）に信長に召上げられた。虚堂墨蹟は同家に伝来。秀吉の道具揃えなどには借用のことがあったが、召上げは無かった。その後、栄清が家督を譲られている。

註5 三河武士。日向守。家康の老臣。天文三年（一五六七）慶長十四年（一六〇九）で天正十一年（一五八三）家康の秀吉に対する通好の使者として上京。家康献上の初花肩衝茶入を献進したことで有名。

註6 浮田とも書く。天正元年（一五七三）明暦元年（一六〇五）直家の子。幼少より秀吉に養われ、四国・九州・小田原および朝鮮の役に大将として出陣。権中納言に昇り、五大老の一人となった。関ヶ原の役には大坂方の盟主に推され、敗れて薩摩に逃れたが、死を許され八丈島に配流、四十年のち配所に没した。大名物初花肩衝を太閤遺物として所持していた。

註7 江戸初期の福井藩主。結城秀康の長男。慶長十二年（一六〇七）襲封（六十七万石）。大坂冬の陣・夏の陣に出兵し真田幸村を討つたが戦功による所領の加増が無く、幕府に不満を持ち、不遜な行動が多かったため、元和九年（一六二二）改易、その後豊後萩原に配流。落飾して一伯と号し、同地で病死。

#### 引用・参考文献

『原色茶道大辞典』淡交社、二〇〇六年  
『戦国人名辞典』吉川弘文館、一九八一年  
『日本史広辞典』山川出版社、一九九九年  
『角川日本史事典』角川書店、一九六六年

## 窯元紹介

宮原隆窯

宮原隆次

当窯元は、遠州七窯の一つ高取焼発祥の地、宅間窯跡近くの自然の中、約四百年前の先人たちが夢見て作陶し励んだこの地に開窯しました。

古典を横目で見ながら、高取焼に囚われず焼締を中心に、粉引、灰釉等による、毎日楽しんで使ってもらえる器を、季節を追いながら毎日自由気ままに楽しんで作品作りをしています。

宮原隆窯は、開窯から約三十年になり、現在の地に窯を開いてからは約二十年になるそうです。庭先からは鷹取山も眺められる景色の良い場所で、訪れるだけで癒や



されるような感じがしました。

活動のきっかけは、直方市内の陶芸教室に通ったことから、講師を任されるまでになり転職されたとのことでした。

作品の方は、実に様々なのですが、私は近代的な作品に目が止まりました。

展示内容も季節や気分に合わせて変わるようで、何回行っても楽しめますので、是非、一度足をお運びください。

宮原隆窯

宮原隆次

〒八二二一〇〇〇五

直方市永満寺宅間一〇五五

電話 〇九四九一四一六六二〇

FAX 〇九四九一四一六六二〇

## 活動の記録

### ●子供焼物教室

〈平成二十八年六月〜九月〉  
場所…直方市内の小学校

今年度の子供焼物教室は、九月二十一日(水)の新入小学校を最後に全て終了致しました。ご参加・お手伝いくださいました皆様、ありがとうございました。

### ●学習部会

〈平成二十八年七月〜十二月〉  
時間…十時三十分〜十二時  
場所…えみくる(直方市中央公民館横)

今年度の学習部会は、全四回の講座と、まとめ講座まで終了致しました。多数のご参加ありがとうございました。

なお、まとめ講座の内容は次号にて紹介させて頂く予定です。

また、平成二十九年三月下旬にバスハイクを予定しています。

### ●地域対象焼物教室(ふくおか県民文化祭)

〈平成二十八年十一月二十七日(日)〉  
場所…なかもホール

ふくおか県民文化祭が、十一月二十七日(日)に中間ハートホールにおいて、「躍動する青少年と高齢者のつどい」というテーマで開催されました。

日本舞踊、ダンス、太鼓など元気なパフォーマンスがステージで披露されていました。本会は、会場ロビーで焼き物づくり体験教室を行いました。二時間程度でしたが、七人の参加がありました。子供はかわいい茶碗を作りましたが、大人は平皿が多く、模様を入れたり、花の絵を描いたりして楽しんでおられました。

余りの粘土でお猪口を作られた方もありました。自分の手づくりの陶器で焼き魚を食べたり、お酒を飲んだり、おやつを置いたりして、生活の中で手づくりの良さを実感していただけたらいいなともっています。

気になることが一つありました。小学校高学年らしき男の子が、何度も見に来ました。会員が「しいの?」と声をかけると「いいや。」と言ってさっと走って行ってしま

いました。何か作りたかったのかもしれない。もしそうなら、次は、勇気を出してチャレンジしてほしいと願いました。

倉田豊子



## なんでも掲示板

●熊本復興支援チャリティ展示販売  
〈平成二十八年七月五日(火)・八月五日(金)〉  
時間：九時～十二時  
場所：殿町商店街内(五日市)

七月と八月の二回、五日市に合  
わせて、明治町商店街にて『古高

取を伝える会』で、熊本地震で被災した熊本城の修復を支援しようと臥瀧庵焼物教室の先生と生徒の作品展示・販売を開催しました。

このチャリティの結果、十万一千五十円を八月八日に熊本市役所の熊本城災害復興基金に福岡銀行より振り込みました。

以上、ご報告いたします。

副島邦弘



熊本城

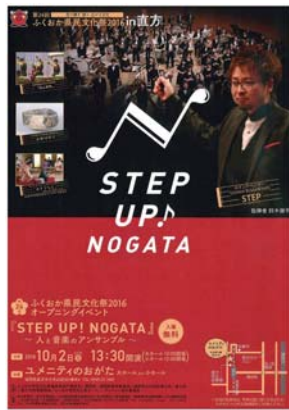
●ふくおか県民文化祭に参加  
〈平成二十八年十月二日(日)〉  
場所：ユメニティのおがた(小ホール)

十月二日(日)から始まった「ふくおか県民文化祭」のオープニングイベントに参加しました。

古高取を伝える会は、「高取焼展示」の案内を担当。資料室の発掘品が数点展示され、小川知事も立ち寄られました。

会員(田中さん、吉田さん)達の抹茶の呈茶サービスも行い多くの人たちの来場がありました。

永富セツ子



●金剛山もととり協議会だより  
ちよくらふれ旅の開催  
〈平成二十八年十月九日(日)・十一月二十七日(日)〉  
場所：金剛山もととり広場

本年も、ちよくらふれ旅(直方鞍手広域連携プロジェクト)に参加しました。

十月九日(日)は実施しましたが、十一月二十七日(日)は、あいにくの雨天の為中止にしました。

里山散策は人気プログラムで、早々に満杯になり対応に苦心しました。

楽しみにされておられたのに十  
一月中止残念でした。

四季を通じて魅力のある里山に  
変化しています。

散策は自由です。是非遊びに登  
つて下さい。

末松登志子



●(西皿山)開窯三百年・筑前黒田御用窯  
高取焼のルーツを巡る旅  
〈平成二十八年十月二十三日(日)〉  
場所：福岡市・直方市・小石原など

筑前黒田藩御用窯味楽窯・味楽窯保存会の主催で「高取焼のルーツを巡る旅」が開催され、多くのお客様と味楽窯第十五代当主の亀井味楽氏が直方市を訪れました。直方市中央公民館では、会員の副島氏による講義と二階にある郷土資料室の展示品を見学。その後、宅間窯跡・内ヶ磯窯跡を訪ねられました。



●筑豊美術展にマイ茶碗展示  
〈平成二十八年十一月十八日(金)〉  
二十日(日)〆  
場所：直方市中央公民館

筑豊美術展(西日本新聞社後援)の七十回記念に際し、子供焼物教室で制作した直方市内の全十一小学校の六年生のマイ茶が直方市中央公民館に展示され、西日本新聞に記事が掲載されました。

●秋月探訪(直方見聞塾)  
〈平成二十八年十一月二十五日(金)〉  
場所：朝倉市秋月野鳥六九五の一

直方見聞塾の企画で、秋月探訪が行われました。

秋月美術館は、黒田藩御用窯(高取焼)の古高取から遠州高取まで伝世品と古窯跡出土品約百点余りが展示されていて、一見の価値ありです。

この美術館は北九州在住の個人の収集品を展示するために作られたそうです。

数年前、古高取を伝える会で秋月探訪をした折は改装中でした。現在、隣接地に建築中の秋月郷

土館は、平成二十九年に完成予定とのことです。

我が町に郷土資料館が欲しいなあと強く感じた秋月探訪でした。

寺井秀子



「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。  
事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

毎年のことですが、新年は新たな気持ちで目標を立てます。年末から、たった一日過ぎただけなのに不思議な気持ちですが、何事にも区切りは大切なことだと思えます。

一年を振り返り反省。少しだけ難しい目標を立てます。会の運営は年度なので、新しい目標設定までは少し期間がありますが、残りの事業をしっかりと遂行したいと思えます。今後ともご指導・ご鞭撻の程何卒、宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO 24

〈発行〉

古高取を伝える会

〈発行日〉

平成二十九年一月一日

〈現在の会員数〉

正会員 五十四名(五十四日)  
賛助会員 十八名(二十七日)  
団体 一団体(二日)

〈マイ茶碗の数〉

五千二百七十一個

〈事務局〉

〒八二二一〇〇二六  
福岡県直方市津田町七十四  
TEL 〇九四九(三)一三二一